

《薬局サーベイランスコメント》

『2016年第7週以降7週連続して推定患者数の減少が続いているが、第13週までの累積患者数は1000万人を超え、同時期までの患者数としては本サーベイランスが始まって以来最多』

2016年4月5日

済生会中津病院感染管理室

安井 良則

薬 局 サ ー ベ イ ラ ン ス

(<http://prescription.orca.med.or.jp/syndromic/kanjyasukei/index.html>) からの2016年第13週(3月28日～4月3日)の1週間当たりのインフルエンザの推定患者数は394,904となり、第7週以降7週連続して減少が続いています(図1)。各都道府県別の第10週の人口1万人当たりの1週間の推定受診者数をみると、福井県、北海道、秋田県、高知県、富山県、新潟県、愛媛県の順となっており、35都道府県で前週よりも減少がみられています。4月4日(月)の推定患者数は73,907と前週の月曜日(3月28日:91,051)よりも減少しており、第14週(4月4日～10日)も更に減少していくものと推定されます。

2015年第36週から2016年第13週までの累積の推定患者数は10,007,227(10,007,000)と同時期の累積患者数としては、2009年にこの薬局サーベイランスが開始して以来最多となりました。年齢群別では5～9歳(21.2%)、10～14歳(13.3%)、40～49歳(12.9%)、30～39歳(12.2%)、0～4歳(10.8%)、50～59歳(7.7%)、20～29歳(6.7%)、60～69歳(5.7%)、15～19歳(5.3%)、70歳以上(4.0%)の順となっています(図2)。また、第13週では流行の中心となっていた小児を中心とした年齢群は春季休暇を反映して減少が続いていますが、20代と50代、60代、70歳以上の年齢群では増加が見られています。

国立感染症研究所感染症疫学センターの病原微生物情報(<https://nesid3g.mhlw.go.jp/Byogentai/Pdf/data2j.pdf>)によると、これまでのインフルエンザ患者由来検体から検出されたインフルエンザウイルス(4,727検体解析)は、A/H1pdm 56.9%、B型 33.2%、A/H3(A香港)亜型 9.9%の順となっています(図3)。また、直近の5週間(2016年第9週～第13週;これまでに388検体検出報告)では、B型 60.1%、A/H1pdm 36.9%、A/H3(A香港)亜型 3.1%の順となっていて、B型が流行の中心となりつつあります。

今シーズン（2015/2016 シーズン）は1月に入ってから患者数は急増し、2016 年代6 週を流行のピークとしてその後は患者数の減少が続いていますが、本格的な流行期間が5 週間（第5～9 週）と長く続き、第13 週までの累積患者数は、同時期までの患者数としては2009 年の薬局サーベイランスが開始して以来最多となっています。学校の春休み期間中でこれまで流行の中心であった年齢層では患者数の減少が続いていますが、B 型インフルエンザの割合が増加するにつれて成人層を中心に患者数の増加がみられている年齢群もあり、今しばらくはインフルエンザの患者数の推移には注意が必要です。

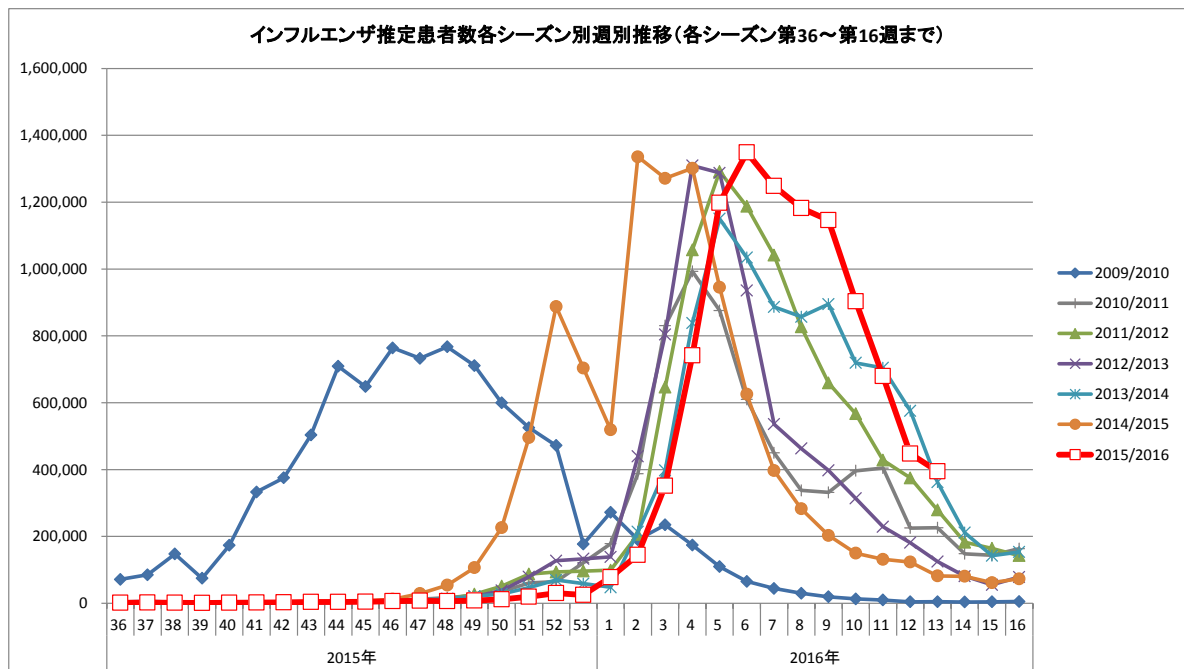


図1. 過去5シーズンと今シーズン（2015/2016 シーズン）の第36～第16 週までのインフルエンザ推定患者数の週別推移

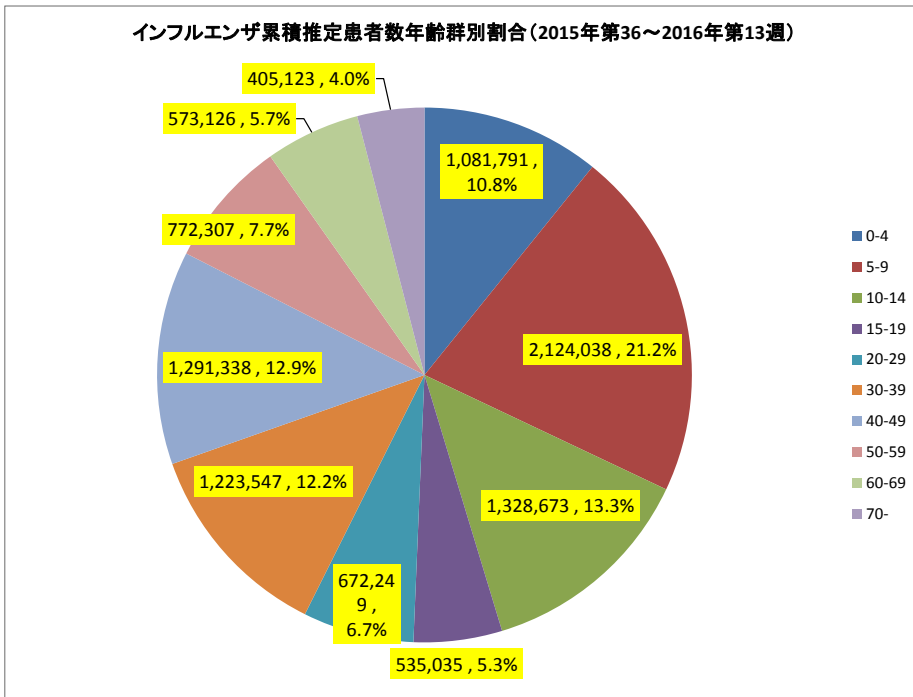


図 2. インフルエンザ累積推定患者数年齢群別割合 (2015 年第 36~2016 年第 13 週、累積推定患者数= 10,007,000)

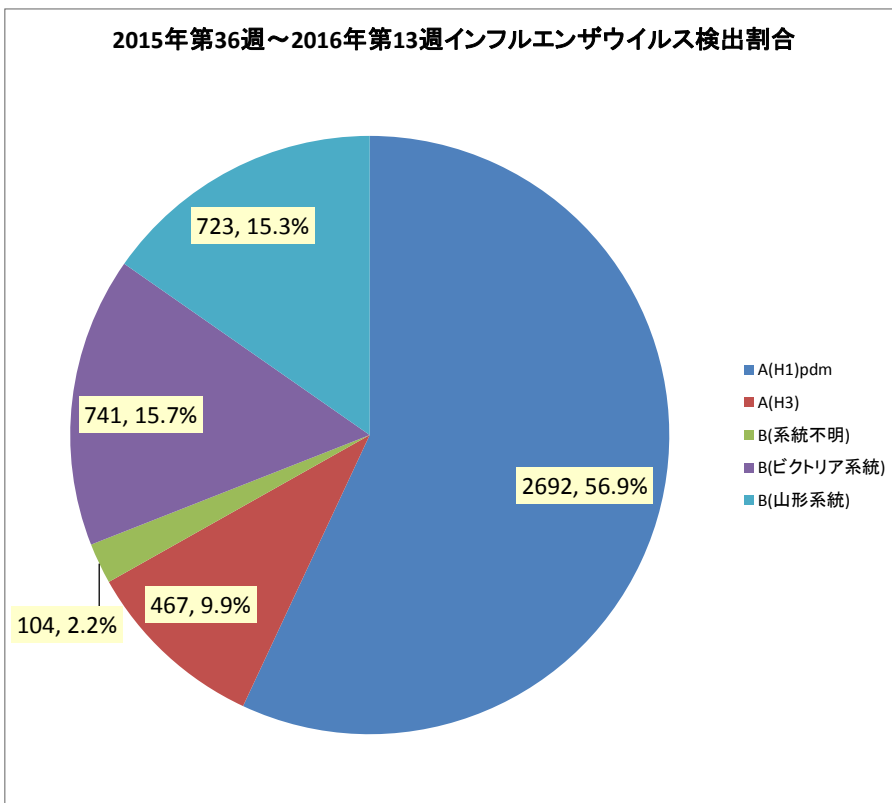


図 3. 2015 年第 36~2016 年第 13 週インフルエンザウイルス検出割合 (総検出数=4,727)